

スピノザの物体論における二つの合一  
立花達也（大阪大学）

スピノザは『エチカ』において、個物 [res singularis] と個体 [individuum] にそれぞれ定義を与えている。本発表の目標はこの両者の差異を、それらの共通性とともにも明確化することにある。この二つの定義はともに合一の形式、つまり諸々の事物が一つのものとして見なされる条件を示している。「個物」の規定は第 2 部定義 7 でなされる。

「個物によって私は、有限でありかつ、決定された存在を有する諸々の事物を解する。もし複数の個体が一つの活動において、すべてが同時に一つの結果の原因であるかのように共働するならば、私はその限りにおいてそのすべてを一つの個物と見なす。」

じつは、この定義は『エチカ』の他のいかなる箇所でも参照されることがない。つまりこの定義がいかに用いられるべきかは不明なのである。それゆえ、Gueroult はこの定義を第 2 部定理 13 備考のあとに挿入される物体論に寄与するものとして解釈する。この物体論はスピノザによる個体論でもあり、そこでは「最単純物体」や「複合物体」が論じられる。そのなかに置かれているのが後者の「個体」の定義であり、それは以下のようにパラフレーズできる。つまり、いくつかの物体が残りのものから圧力を受けることで、相互に接触し、運動を一定の割合で共有化しあうとき、すべてが同時に一つの個体を組織しているという。Gueroult はこれを「周囲の圧力 [pression des ambiants]」でもって説明される合一の形式として読み、さらには先の個物の定義もこの形式に従属させて理解する。しかし、このような解釈は個物の定義そのものが有するポテンシャルを捉え損なうのではないか。

本発表は第一に、「周囲の圧力」という外的原因のみによって個体の合一を規定する Gueroult の解釈が、個体の定義そのものにたいして妥当かどうかを検討する。争点は、いかにして個体はその形相を変化させることなく諸々の変容を受けることができるのか、このことを合理的に説明することにある。発表者は「周囲からの圧力」によってのみでは個体性、および個体の形相の同一性を規定するために不十分であると主張する。またしたがって、この説明を「個物」の定義の解釈へと輸入することも無効なのである。

そして第二に、個物の定義の後半部分（「もし複数の個体が～」）をいかに解釈すべきかを検討する。この文章はじつは、そのラテン原文から見ても一義的に解釈することが難しい。このことはいままで見過ごされてきたが、しかし先に述べた『エチカ』における未参照とともに当定義の理解を妨げる一因になっている。本発表は、もっとも妥当と思われる解釈を提示し、その解釈が及ぶ射程を明らかにする。具体的に発表者が提案するのは、個物の定義にあらわれる活動 [actio] を、個物に帰属する活動（つまり個物を活動者とみなしたときの活動）としてではなく、個物の規定そのものにかかわるものとして理解することだ。つまり、この活動は個物というものの存在あるいは認識にたいして論理的に先行するのである。